

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02530

研究課題名(和文) 現代韓国語における脱規範的な活用形式の記述的研究

研究課題名(英文) Descriptive Research of Non-normative Forms in Modern Korean

研究代表者

中島 仁 (NAKAJIMA, HITOSHI)

東海大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：40439708

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：韓国語は不規則活用をする用言が多い。正しい活用形が国立機関によって定められているが、実際にはそれから逸脱した脱規範的な活用形が非常に多く用いられている。本研究ではその脱規範的な活用形について調査した。具体的にはコーパスから脱規範的な活用形を収集しどのようなパターンがあるのかを調べた。そしてその次に、韓国語母語話者322名に50単語の総223の活用形について実際にその形式を使うことができるかというアンケート調査を行った。その結果、脱規範的な活用形の各パターンごとに脱規範的な活用形が予想をはるかに超える広範囲にわたり使用されていることを明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：There are a lot of irregular conjugation verb in Korean. The normal(correct) forms of these are defined by the National Institute, but in fact non-normal forms have been used quite often. In this research, we investigated actual usage of such non-normal forms. Specifically, we gathered examples of non-normal forms from the corpus and examined what kind of patterns there are. Then, after that, we conducted a questionnaire survey on 322 Korean native speakers and asked them actual usage for 223 utility forms of 50 words. As a result, in every pattern, non-normal forms are widely used beyond our expectation.

研究分野：韓国語学

キーワード：韓国語 言語学 朝鮮語 活用形 不規則活用 非規範的 脱規範的

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 韓国語は用言の種類、即ちその用言が動詞なのか形容詞なのかにより、活用形態に差異が現れることが少なく見方によっては単純だとも言える。しかしその反面、不規則な活用を見せる用言の数や種類が多いという特徴も存在する。不規則活用についての研究は歴史が古く周時経等の 20 世紀初頭の研究から始まり、その流れを汲んだ韓国の伝統文法的研究、そして 1970 年代からの生成音韻論的研究へと続く。今世紀に入ってから韓国語教育に対する関心の高まりから、教育的な面からの研究も活発になりつつある。

しかし、これらの研究はあくまでも規範的な活用形態に関する記述を主としたものであり、実際にはそれらの規範から逸脱した、いわば「脱規範的」な形態が多く使用されているという実態がある。具体的には、動詞「 $\text{알다}$ 」(知る、分かる)の活用形の一つ「 $\text{알}$ 」が「 $\text{알}$ 」と用いられたり、「 $\text{알}$ 」(願う)の活用形の一つ「 $\text{알}$ 」が「 $\text{알}$ 」と用いられたりする例が、こうした「脱規範的」な形態の例として考えられる。

(2) このような脱規範的形態の存在を部分的に言及した研究は多く存在するが、それが脱規範的な形態であるということから、これらの形態のみを深く扱った研究は行われてこなかった。韓国では韓国語に関する規範が国や関連機関によって細かく定められており、それから逸脱した形態を用いると間違いであるとする見方も根強い。実際に韓国語母語話者がその形態を使用している、非母語話者が使用すると間違っていると指摘されることもある。韓国語教育的立場から見ても、教育の場面では規範的なものを教えざるをえず、ほとんどの教材で脱規範的な形態については言及すらされていない。しかし、学習者が実際に使用されているそのような脱規範的形態に接した時に戸惑いを覚えることは容易に想像されるため、少なくとも中級から上級の学習者には脱規範的形態に関する情報が必要であるにも関わらず、その全体像が未だに明らかにされていないという状況にあった。

## 2. 研究の目的

脱規範的な活用形態としては、(1)母音調和に従わないもの(  $\text{알}$  :  $\text{알}$  (基本形規範形:脱規範形、以下同様)) (2)語幹末母音が変化するもの(  $\text{알}$  :  $\text{알}$  ) (3)音節が脱落するもの(  $\text{알}$  :  $\text{알}$  ) (4)音節が追加されるもの(  $\text{알}$  :  $\text{알}$  ) (5)語幹末の  $\text{ㄹ}$  が脱落すべき環境で脱落が起こらないもの(  $\text{알}$  :  $\text{알}$  /  $\text{알}$  ) (6)  $\text{ㄹ}$  が現れるべきではない活用形に  $\text{ㄹ}$  が現れるもの(  $\text{알}$  :  $\text{알}$  ) といったタイプのあることが知られている。しかし、例えば(1)のようなタイプでは、「 $\text{알}$ 」と同じ陽母音語幹の

用言でも「 $\text{알}$ 」(よい)などは規範形が優勢で、脱規範形である「 $\text{알}$ 」がほとんど用いられない、といった語彙による違いが見られる。また、同じ「 $\text{알}$ 」でも、  $\text{알}$  :  $\text{알}$  の場合は脱規範形が広く用いられるが、さらに  $\text{알}$  :  $\text{알}$  という活用形になると、脱規範形はほぼ用いられないといったような、活用形における差も見られると考えられる。しかし、このような実態は従来の研究でほとんど明らかにされていない。

そのため、本研究では以下の点について明らかにすることを目指した。

脱規範的な活用形式にはどのようなパターンが存在するのか。

どのような用言で脱規範的な活用形式が用いられるのか。使用される語彙に制限があるのか。

どのような語尾との結合時に脱規範的な活用形式が用いられるのか。また、その脱規範的な活用形式は語幹と語尾のどちらに現れるのか。

脱規範的な活用形式により許容度の違いが存在するのか。

## 3. 研究の方法

まず、口語コーパスやウェブ文書などを中心に、脱規範的な活用形式が用いられた用例を収集してデータベースを構築し、その分析からどのような形式が用いられやすいのかを分析する。さらに、その結果をもとにアンケートを作成し、韓国語母語話者へ調査を実施する。アンケートでは韓国語の語彙の使用頻度調査の上位にあるものから、脱規範的活用のパターンごとに数語を選び、各単語ごとにことなる語尾が付いた場合など、条件を少しずつ変え、それぞれの語形を本人が使用するか、本人は使わないが使う人がいるか、もしくは話も聞きもしないかということで答えてもらった。そして、その結果からどれくらいの範囲で脱規範的な活用形が用いられているのかを明らかにする。

## 4. 研究成果

まず、コーパスの調査は韓国の国立国語院の「教育用基本語彙」の A-C 等級の中から 362 語を選定した。選定の基準は不規則活用の用言を中心に、不規則活用ではないものも子音語幹のもの母音語幹のもの、陽母音語幹のもの陰母音語幹のものなどまんべんなく選んだ。そして、その単語 1 語 1 語について考えられる脱規範的な活用形式がコーパス上に存在するか調べていった。コーパスは 21 世紀世宗計画の口語コーパスで行った。脱規範的な形態が口語で現れやすいためである。

コーパスの調査からわかったことは以下のとおりである。

脱規範的な活用形式が最も用いられやすいのは、不規則活用ではない子音語幹用言

で陽母音語幹であるものと、語幹用言で一の一音節が母音トの場合であった。

例)  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$

ただし、これらに関しては母音がトのものは見られなかった。

≡ 語幹用言では≡ が脱落しないパターンが が続く場合に非常に多く現れる。

例)  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$

≡ が本来ない場所に追加されるのは 不規則活用に限らず、他の語彙でも見られる。

例)  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$

一部の用言で活用形の母音トがトに変わるのとは広く見られる。

例)  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$

以上のものは口語コーパスとはいえ、書かれた言語にまで現れることを考慮するとかなり定着した用法であると言える。

次にアンケート調査の結果についてである。アンケート調査は以下のものについて行った。被験者に尋ねたのはいずれも脱規範的な形式でそれを自分や周囲の人が使用するかを答えてもらった。

陽母音トの子音語幹用言に ≡ がつくもの  
例)  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$

陽母音トの子音語幹用言に ≡ がつくもの  
例)  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$

陰母音の子音語幹用言に ≡ がつくもの  
例)  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$

語幹用言の / 形でトとトが交替しているもの  
例)  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$

不規則活用用言で≡ が添加されたものと、 / 形でトとトが交替しているもの  
例)  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$

≡ 語幹用言で≡ が脱落しないもの  
例)  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$   
その他、語彙別に見られると思われる形式  
例)  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$

それぞれの結果は以下の通りである。(などの番号は上のものと対応)

などの形式は自分も使用する、使用する人がいる、もしくはその両者と答えた人が使わない(以下「使用する」と略)と答えた人が誰も使わないと答えた人より圧倒的に多く平均しておよそ 78%がそのいずれかと答えた。ただし、 $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  など後ろに語尾などがつくると最低で 17.4%まで落ちる。つまりパンマル(いわゆるタメ口形)の非過去形での使用に関してはかなり一般化していると言える。

同じ陽母音でも  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  に比べ使用すると答えた比率が下がった。5つの単語について調査したが、その中で最も使用するという答えが出たのは  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  という形で 44.7%であった。逆に最も使われないと答えられたのは  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  の 11.5%である。このパターンに関しては単語によっても使用率に差が見られる。

このパターンは誰も使用しないということだが、全てを通して圧倒的に優勢であった。最も多いもので  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  の 16.7%、少ないもので  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  の 10.8%であった。

語彙によって使用率に非常に大きな差が見られた。 $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  に関してはどの語形であっても使用する答えた人が多く  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  は 89.7%、最も低い  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  でも 45.9%が使用するという結果が出た。しかし、陰母音の場合は状況が異なり使用しない人が圧倒的に多く、陽母音であっても母音がトの場合は最も使用すると答えた  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  でも 32.6%にとどまった。このパターンでは陽母音で母音がトの場合に関しては語尾にかかわらずかなり一般的に使用されていることがわかった。

≡ が添加されるものは使用するという答えが単語によってばらつきが見られた。 $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  と  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  に関しては≡ 添加形を最高 46.3%、最低 30.4%使用すると答えたのに反し、 $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  では最高でも 27.6%、最低 12.1%しか使用しないという結果となった。トとトが交替するものに関しては  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  と同様の傾向が見られた。≡ が添加される現象に関しては語彙による要因が大きいと考えられる。

語幹に直接語尾が付く場合には≡ が脱落することが非常に少な 12%前後であるのに対し、 $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  のように  $\begin{matrix} \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \\ \text{ト} & \text{ト} & \text{ト} \end{matrix}$  が挿入される場合に

においては最高 46.3%使用すると答えた。ただし、動詞の過去連体形と形容詞の現在連体形にも が挿入されるにもかかわらず、≡ 非脱落形を使用するという答えが 12-25%に落ちるとい違いが見られた。

個別形式で最も使用すると答えが多かったのは / で活用形にかかわらず 90%前後が使用すると答えた。その他、 / , / , / , / , / も使用率が非常に高く新たに基本形として認めることも視野に入れる必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

Hitoshi Nakajima, Non-normative Forms of Korean, The 20th Meeting of the International Circle of Korean Linguistics, 27-29 June 2017(発表は 28 日)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

なし

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

なし

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

中島 仁 (NAKAJIMA, Hitoshi)

東海大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：40439708

(2)研究分担者

須賀井 義教 (SUGAI, Yoshinori)

近畿大学・総合社会学部・准教授

研究者番号：60454641